

# 槐

かい

岡井省二創刊

平成17年6月号

平成十七年六月一日発行 第十六巻第六号 通巻第一六八号（毎月一回一日発行）  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



# 花の渦

高橋将夫

春昼の人の湧きくる神の山  
春の鳥離れてそばにをりにけり  
折々に春風かよふ間柄  
大田螺次の世へ行く用はなし

相談の上で蒔蕪植ゑにけり  
空つぽの氷室にもの芽のほぐれ  
保育器の中にも春の眠りかな  
兜煮の口元おぼろなりしかな  
この上は死ぬの生きるの猫の恋  
曼荼羅をめくればそこに春の空  
大日や白砂の上の花の渦

春の顔

本田俊子

木菟の声からだの中に落しけり  
アポロンの神に砂絵や初山河  
鯨ひげ風に祖先の音すなり  
唐織や能衣の上に春の顔  
にほひたつ硯の海に柳かな  
山笑ふ大声の僧ひとり棲み  
さくら咲く墨を納めし桐の箱  
しきりなる花吹雪く中に幹はあり  
近づかず櫛の花ときけばなほ  
春の坂微笑の空の海を見む

特別作品

松の根につまづくなかれ春帽子  
蓬生やぞくぞく人の出で来たる  
赤ん坊の掌の中にある桃の花  
鉄しぼる炎のいろや濃山吹  
三月の面てマンモスのまつげかな  
清和なるモネの光となりゐたり  
耳の穴痒し卵の花腐しかな  
白夜なる尾ながふくろふの眼かな  
くちなはの草うごかさず進みぬる  
貝殻の触れ合ふ音や鮎ごりちぢむ

# 槐安集

市場基巳

風きびし海の没日に鴨ちりばめ  
冬雲のさすらひごころ見せてをり  
寒禽の山を歩いて老いゆくも  
夕月も凍てなきがらは眠りゐる  
海光る白まんさくの咲く日より

水野恒彦

紅梅や楽章を聞くごとくなり  
考へてゐてだんだんに海市なり  
くく立ちやおおくにぬしを素通りす  
朧かや鹿茸ろくじょううかと嗅ひだるに  
虚子の忌の昏るる酢昆布噛みをれば



石脇みはる

あめふらし生きたる証ありにけり  
修正をくり返してや彼岸潮  
土塊をほぐしてをりし遅日かな  
鴟のあと目白来てをる木椅子かな  
木の音の地にもどりけり花の山

竹内悦子

一粒がたちまち春のあられかな  
杉花粉金色にしてはばからず  
木の洞に鳥の来てをる納税期  
にんげんのこゑ紅梅と白梅と  
玉筋魚いかなごや縞のパンツを干してある

木下野生

足元にひとすぢの水大千瀾  
夕霞出てゆく船を見てをれば  
速達の表にわが名春の暮  
春昼や鏡に顔の映りぬて  
さくら見てをり足元に石ひとつ

中島陽華

神童の厄落し紅梅のま下かな  
梅花芬芬唐様の木鼻かな  
土佐みづき聚楽第門塗り直し  
子安貝耶蘇も達磨も空海と  
勿体無きの御事や三月菜

延広禎一

猩々や花の星座と星の渦  
春月を鞠としたりき籠の舞  
佐保姫に声かけらるる渡し守  
春笋の掘られてゐたる密寺かな  
桃咲ける御霊鎮めの社かな

栗栖恵通子

ルパシカの漢隣家に西東忌  
魚島の枕均らしてをりにける  
判官にすりより亀の鳴きにけり  
花待ちのくもり鏡の中にゐる  
春月の沖に出てをる遊行かな

加藤みき

海峡にタンカーの数陽炎へる  
葉隠れの椿も数へみたりける  
唐櫃に雲雀の風の入りにけり  
きつねだなフリルあまたの絹衣  
逃げ水や道の上に道ありにける

雨村敏子

三月の眩しきものに人のこゑ  
この海の白魚といひて海を見き  
蓐一顆安心のいろありにけり  
日が照つて山を歩いて桃の花  
桃の夜の明かりなりけり筆を擱く

大島翠木

風花に聾棧敷で啜ゆく  
二車線を真つすぐに来て涅槃かな  
佐保姫やつまんでゐたる醤油豆  
砂時計返す天地や春の霜  
花吹雪我にカリスマあるとせば



# 槐市集

黒田咲子

鉄板を踏みて畑へ豆の花  
三月の水張つてある田なりけり  
百枚の畳の冷えや初ざくら  
花巡るちよつとそこまでゆくやうに  
竹むらの間々に石ある春嵐

近藤きくえ

神山に佐保姫のこゑをちこちに  
夜泣き石囲はれてあり地虫出づ  
水草のゆらぎてをりし春の虹  
左手より汽笛近づき朧の夜  
望潮こゑの弾みは幼達

近藤紀子

翼行く春大潮のうねりかな  
差し交す梅の小枝に蕾ある  
のど飴を春帽の子にもらひをり  
春日傘伯母ごピンクの似合ひたり  
あれやこれや思ひも入れし土筆かご

近藤喜子

春愁や兎にも角にも先づ眠る  
永き日やぶらぶらとある両の腕  
春月や何か動きし藪の中  
青々と星育ちぬる花林檎  
日の暈のふくらみ鬱金桜かな



# 槐集

## 高橋将夫選

風光る円墳おほひなる翡翠 岡崎

近藤 喜子

茅花野に満つ創世の光かな

囀や糺の森のゆるぎなし 一枚方

近藤きくえ

花ミモザこの雨ダナエまとひたる

へそ石に硬貨置きあり春うらら

清明や光を髪に編み込みぬ

臙夜の薩摩切子の光かな

リラ冷えやくるりと星座早見盤

無名橋と記しありけり鳥雲に

水罨露の花咲くあたりなり 枚方

中野 京子

谷村 幸子

とけのこる空のあるらし北開く

設計図かこむ石工や草もゆる

日の中に生まれし春の雪なりし

男二人藪巻ほどく手際かな

春眠の海馬に神のおはします

春疾風梵字曼荼羅すかしみる

日当りて雀鳥の梅なりき

菜の花や父の名残の黒き土

臙夜の臙にてかほ洗ひけり 安城

天野きく江

中田 禎子

亀鳴くと人はゆるびてをりにけり

星の渦に 天瓊あまのぬほこ 矛ほこ よ桜鯛 摂津

切り株に一枚の空鼓草

漆彩の花のトンネル阿修羅仏

春の蜘蛛逃げたくなりて歩き出す

春園の暗がりにて点眼す

貌鳥や夢の一部は切り上げる

パレットに青しぼり出す辛夷かな

篠笛や背を向けてをる春の墓

# 銀河往来 高橋将夫

「ハンドルの遊び」(2)

◇『湖心』4(春)号(代表佐滝幻太)より。

(俳句時評) 湖畔 谷口智行

海鼠うごきてハンドルの遊びほど 高橋 将夫

(「俳句界」一月号、「炎心」より)

海鼠のあの一瞬の動きを「ハンドルの遊び」と言った。映像処理の妙である。静から動、動から静への海鼠の実相。どこかユーモラス。私には一句そのものがうねって見えた。

「俳句研究」一月号、藤田湘子と宇多喜代子の対談「手仕事の俳句」の一部を抜く。

藤田 とにかく、ことばの広がる魅力を知ると俳句から離れられなくなるね。そのことばがうまく組合ざれば自分が想像した以上に大きい空間が広がって行くんだが、それを信じないで、全部埋めちゃおうとするんでしょう。結局意味的になつてことばの力を發揮する場がない。

宇多 例えば白いテールブルクロスがここにある、「白」という字を書く。すると、「白」という字がいつの間にか「雪」に変つていく。目の前に広がっているのはテールブルクロスではない「雪原」となる。そういうことばの楽しみ方がありませんでしよう。

高橋将夫氏の場合、「海鼠」が「ハンドルの遊び」という連想に繋がったという訳である。その発想はきわめて飛躍的で、作品に普遍性があるという評言は当たらない。しかし、納得させられてしまうから不思議だ。

◇「槐集」観照

花ミモザこの雨ダナエまとひたる 近藤 喜子

ギリシヤ神話の世界。ゼウスが黄金の雨となって、青銅の部屋に閉じ込められたダナエのもとに通つたという。ミモザの咲く頃だったのだろう。

春眠の海馬に神のおはします 中野 京子  
人の思惟を脳生理学的に実証的に説明しても、最後は霊性の座に行きつく。作者は春眠の海馬に霊性の座を見ている。

朧夜の朧にてかほ洗ひけり 天野きく江  
朧で顔を洗つたそうだ。作者ならやりそうだ。でも、朧では目が覚めなかつたのではなからうか。

囀や糺の森のゆるぎなし 近藤きくえ  
囀りで森が揺らぐはずはない。ましてや、糺の森である。それだけに、「ゆるぎなし」で囀りの激しさがよく伝わってくる。

男二人敷巻ほどく手際かな 谷村 幸子  
春になつて、雪折れ防止のために幹や枝に巻いた敷巻を男衆がほどいている。その手際よさに見惚れている図。それ以上の深い意味はないので、念のため。

星の渦に天瓊あまのいぼ矛こよ桜鯛 中田 禎子  
天瓊あまのいぼ矛こはいざなぎ・いざなみの2神が使つた銚。それで星の渦をかきまぜるといふ。桜鯛が居てめでたい。槐の創世記神話。